

韓半島の寺詣り

池田 錦七（昭和9年応化卒）

■はじめに

我が国に大乘仏教が伝えられた経緯については諸説があるが、日本書紀に「欽明天皇13年冬10月、百済の聖明王、西部姫氏達率怒唎斯致契等を遣して、釈迦仏の金銅一軀・幡蓋若干・経論若干巻を献る」とあるので、これを正論とすれば、552年に釈迦仏とともに韓国から仏教が伝来したことになる。

私と韓国（当時の朝鮮）との出会いは、半世紀も昔に遡る。昭和19年の晩秋、今の北朝鮮の首都・平壤から程近い鎮南浦精錬所へ技術指導で出張したときである。滞在は僅か一ヶ月の余ではあったが、所員の方々をはじめ、多くの人々から朝鮮の文化や事情などを勉強させていただいた。このことが、私の心の中に韓国への郷愁にも似た気持ちを芽生えさせるきっかけとなった。

■寺詣でへの途

戦後、その韓国を訪ねてみたい願望はつるばかりであったが、念願が叶ったのは、大戦に続く動乱により、荒廃した韓国国土の復興著しい昭和47年10月であった。しかし、彼の国は哀しくも、南北に分断されてしまっていた。以来、機を見ての訪韓は18回にも及んだ。

そうしたある時、慶州・釜山の寺の僧から、豊臣秀吉がいわゆる文禄・慶長の役で、朝鮮を侵略した史実を聞かされた。それは私が歴史の教科書で知り得たものとは全く異なり、まさに耳を覆いたくなるような衝撃的なことであった。いつの世でも戦争は悲惨だ。寺々を焼き、仏像を破壊し、多くの住民を殺戮し塗炭の苦しみを与える。そこで私は、全道に散在する寺々を訪ね詣でて、先人の犯した罪障を仏陀にお許しを願い、また同時に、仏教文化の原点を知る旅に出ることとした。

■私の訪ねた寺々

韓国の全域に散在する、由緒ある寺々を訪ねお詣りするのに、十余年の歳月が流れてしまった。或る寺は38度線を越えて軍事境界線の近くまで、また、東シナ海に浮かぶ済州島へは、未だ検閲が厳しかった頃であった。

名刹仏国寺は慶州の街中にあり参詣者も多いが、私の詣った寺々は都市から遠隔の深山幽谷の地に開山されていた。余程の心願がない限り、異国人の参詣はなく、いつも日本人は私とガイドのお詣りであった。以下にその寺々のあらましを記す。

・梵魚寺（ボモサ） 慶尚南道

釜山から20分。海拔800mの金井山の中腹に678年新羅文武18年、義湘大師が建立した禅宗大本山。慶尚南道三大名刹の一寺で、4本の石柱に支えられた「一柱門」が印象的。

・通度寺（トドサ） 慶尚南道

釜山から慶州への途次にある韓国の三大名刹・仏法僧の「仏」の寺。645年新羅善徳王女15年、慈蔵律師が山深きこの地に建立。大雄殿に仏像を安置していない「寂滅宝宮」の寺。

・仏国寺（ブルクッサ） 慶尚北道

慶州の雲を吸い且つ吐くという「吐含山」の中腹に、535年新羅第23代法興王の時代に開山。新羅仏教のシンボルとされていて、歴代王朝の貴重な遺産が所蔵されている。

・芬皇寺（プナンサ） 慶尚北道

慶州駅の近く。634年に創建され、三国統一前は新羅四大名刹のひとつであったが、今は二、三の遺塔がある。

・吐含山石窟庵（ソクラム） 慶尚北道

仏国寺から10km。石窟は前堂、扉道、窟室から成り立つ。車を降りてから山道を歩くのに苦労したが、慶

州平野が一望される景観は素晴らしかった。

・法住寺（ポフチュサ） 忠清北道

1400 余年前、真表律師により俗離山の山深きところに創建された。国宝の大雄宝殿は高さ 21 m、木造五層の塔姿形建物で韓国最大。同じく国宝の双獅子石燈、弥勒仏などもある。

・阜蘭寺（ヨランサ） 忠清南道

扶蘇山入口から徒歩 30 分。一字の小寺で百濟滅亡の時、白馬江に身を投じた 3000 人の女官と百濟王の菩提を弔うために建立された。岩間に滴る水を阜蘭水と呼び不老長寿の薬。

・定林寺跡（チョンリムサン） 忠清南道

百濟時代の伽藍の遺跡。日本の四天王寺と同じ形式で、門を潜ると国宝の 8m の石塔と石仏が残存し、韓国の石塔の始源として名高い。

・金山寺（クムサンサ） 全羅北道

全州市から車で 45 分。金堤金山面の母岳山に、766 年新羅時代に建立された古刹。大雄殿にある国内最大の金色に輝く弥勒仏を有難く拝詣。ここまで足を運ぶ日本人は稀と聞く。

・松廣寺（サンガンサ） 全羅南道

仏法僧の「僧」の寺。順天からバスで 1 時間、曹慶山麓に新羅末期慧璘大師が創建。その後 12 世紀の初め、普照国師の弟子守愚が再建今日に至る。韓国随一の大規模な名刹。

・仙巖寺（ソナムサ） 全羅南道

曹溪山の深山に、529 年百濟成王 7 年に阿道和尚が創立。300 年を経たサツキを始め、椿、雪吐、この山だけの花葉木蓮相など花樹の古刹。百濟三層石塔、半円形石橋は有名。

・道岬寺（ドカプサ） 全羅南道

月出山国立公園の西側山麓に在寺し、山門は荘厳な解脱門。道禅国師の誕生物語で名高い名刹である。参詣者も少なく静寂そのもの、李朝期の磁器片を拾う。

・宝鏡寺（ポギョンサ） 慶尚北道

周王山国立公園内にあり、603 年新羅 26 代眞平王 25 年、智明法師によって建立さる。白馬寺にあった八面宝鏡を貰い受け、ここ寂光殿地下に埋め、金堂を建てて宝鏡寺と命名する。

・甲寺（カプサ） 忠清南道

鷄竜山の西側山麓にあり、百濟時代 420 年、阿道和尚によって創建され、高句麗時代には 3000 人の僧侶がいたほどの大名刹。韓国最古の大寂殿、千仏堂などの重文がある。

・神興寺（シヌンサ） 江原道

新羅・善徳女王の治世に創建された古刹で、李王朝時代の梵鐘をはじめ、大雄殿や冥府殿が現存している。寺域を含めた一帯を「雪岳山」と称し、第二の金剛山ともいわれる名所旧跡。

・洛山寺（ナクサンサ） 江原道

束草から海沿いに南へ 9 km、東海に面して建立されている。671 年唐から帰った義湘大師が、新羅統一を願って祈祷し、九九日にあたり身を投げた。その縁起により建てられた。

・伝燈寺（チョンドンサ） 京畿道

江華島の南端、摩尼山にある。372 年高句麗の小獣林王 11 年創建と伝えられているが、史書には 1259 年高宗 46 年とも謂われる名刹。この島は朝鮮人参の一大産地として有名。

・三房窟寺（サンバブルサ） 濟州島

神様が造ったという伝説の山寺。海拔 400 m の山腹にある洞窟を利用した高麗時代の寺である。洞窟の高さは 5m、中には仏像が安置されている。道内の諸寺とは趣が全く異なる。

■我が国の寺との違い

こうして寺々を巡っているうち、日本とルーツが同じ仏教も、外観的に相違点があることに気づいた。その内の 3 例について考察してみた。

・大雄殿

韓国の寺々は概ね、正面に大雄殿（日本の本堂に当たる）が構え、その左右に諸堂、諸坊が配置されている。大雄殿とは仏教を「大雄」即ち「大英雄」という意味で、釈迦三尊を奉祀し、祈祷、説法、儀式を行う殿堂

である。主尊に釈迦牟尼仏を、左に弥勒菩薩、右に堤華翔羅菩薩の三尊を祀るのが多いと聞かすが、釈迦を中心に、脇侍に薬王、薬上菩薩あるいは文殊、普賢菩薩を置くなど特に定義はないようだ。また、日本の本堂のように天蓋、瓔珞、幢幡などの装飾物はなく簡素である。

・寺院に五彩色

韓国の諸堂宇に白木の建築美はなく、堂の外周、垂水、斗拱など全てが彩色されている。朱、黄、青で彩色された殿堂は荘厳で、煌びやかに眼に映る。我が国にもその例はあるが、黒色を使っているのが腑に落ちず考察してみた。

この国の仏教は中国から伝来したので、仏像、教典を始めその他諸々が、その影響を受けている。なかでも「曆」は、漢字による教典、学問の教書、技術書のなかで重要な位置を占めている。曆の「十干十二支」の起因は「陰陽五行説」に基づくものである。「陰陽二元」の交感から派生した「木火土金水」と「色彩」の関係を思い起こすと、下表のようになり、色彩は五彩であることがわかった。

十干と色彩の関係

元素	木		火		土		金		水	
	キ		ヒ		ツチ		キン		ミズ	
十干	甲	乙	丙	丁	戊	己	庚	辛	壬	癸
兄エ	キノエ	—	ヒノエ	—	ツチノエ	—	カノエ	—	ミズノエ	—
弟ト	—	キノト	—	ヒノト	—	ツチノト	—	カノト	—	ミズノト
色彩	青		赤		黄		白		黒	

道教は陰陽五行説に神仙思想を加味した教えであり、儒教とは自ずから教義も異なる。ここ韓国では道教、仙教の思想を隣国・中国から受け入れたので、服装をはじめ建築その他の彩色に、五行説による配色がなされたと考えられる。

この五行説に従えば「水」は黒に当たる。先に述べたように、韓国国内の古寺名刹の建築物の多くが、主柱は勿論のこと軒先、垂水、斗拱、虹梁から内陣の長押、欄間の彫刻に至るまで、この五彩色が施されているのが理解できる。

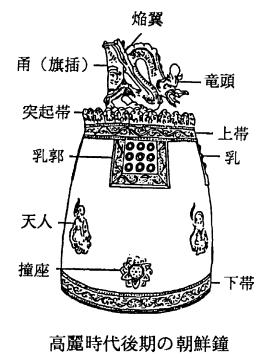
日本の仏閣に五彩色が施されている例は少ない。恐らく我が国は道教の影響が少なかったという宗教上の理由と、彩色の黒の墨、白の胡粉はあっても、赤の朱砂、黄の酸化鉛、青の孔雀石などの顔料に乏しかった故、堂宇に五彩色を施さなかったものと考えられる。

・梵鐘

韓国の鐘楼に懸かる梵鐘と、その百済の国を経て渡来した日本の梵鐘との相違点は、まず日本では鐘楼の上部から頑丈な竜頭で吊り下げられているが、この国では大鐘を地盤すれすれに吊り下げ、その地盤に同容積ほどの深い穴が掘られていることである。次に形状も下図のように全く相違している。竜頭に付帯して角（旗播）があり、ここから音波が抜ける構造になっている。

現在、我が国にある朝鮮鐘 39 鐘の内、下図の鐘は文禄の役で、敦賀城主大谷形部吉隆が、釜山に近い晋州の蓮池寺の鐘を運び、敦賀常宮神社に献納した銘鐘である。私も敦賀在勤中は度々この鐘を鑑賞した。

日本の梵鐘は鐘身を笠形、乳の間、池の間、草の間に大別するが、韓国のものにはその区別がない。乳の間には普通乳頭が 108 個ある。即ち 1 区面に 5 列 5 段で 25 個、4 面で



高麗時代後期の朝鮮鐘



100個、それに各従帯に2個ずつ付けて8個、総計108個となり、韓国より多い。この起こりは仏教語「百八煩惱」を一つ一つの乳頭に託したに他ならない。

「百八煩惱」とは、六根「目、耳、鼻、舌、身、意」より生まれ「苦、楽、捨」の三受により18になる。また六塵「色、声、香、味、触、法」に「好、悪、平」の3種が加味されて18種となり加えて36となる。さらに時の動き「過去、現在、未来」の三世で全てを表現すると、36に3を乗じ、ここに108の煩惱が生まれ出る。乳の一つ一つが、それぞれの重みを担っているのが日本の梵鐘である。韓国の鐘には何故か乳が少ない。

■おわりに

幼い頃から学び聞かされていた豊太閤朝鮮征伐の話を、その善悪の区別もなく長い年月を過ごした今、遠い昔のことではあるが、只管罪障を仏に詫び、寺々や住民達への謝罪の心のほかに、望外の願いはさらになく、僅少の寄進だけが精一杯の私の寺詣りであった。しかし、十余年の旅で、仏は本当にお許し下さったのか、そして私自身、仏教文化の一端を垣間見ることができたのか、内心忸怩たるものがある。健康であれば、いずれまた訪韓したい思いは捨てきれない。

とっておきの写真

橋井 一雄（昭和32年応化卒）

もう47年になりますが、私は1962年8月から64年2月までオランダ外務省留学生として、南オランダのアイントホーベン大学化学工学科のスハイト教授のもとで研究をしました。

開校間もない大学で学生数は250人、日本人留学生は私一人でした。留学中の1963年9月26日、大学校舎の完工記念式にユリアナ女王陛下のご来臨があり、私は外国人留学生代表として会見の榮に浴し、握手を求められ、仲間や教授の秘書アケネさんから、「その手は洗ってはいけませんよ」などと言われたものです。

写真は、学内広報に出ました。この広報は、今も大切にしています。



とっておきの写真—ユリアナ女王陛下との会見—

Planned Happenstance (プランド ハップンスタンス) 随想

[第1話] 日高敏隆先生と動物行動学

藤平 正氣 (昭和 44 年応化卒)

はじめに

人財開発関連業務を担当したご縁で約 5 年前の会社人間時代、キャリアカウンセリングやコーチングを再学習する機会を得た。その折、必然の導きと偶然の出会いと思われる“Planned Happenstance”の理論と実践に遭遇した。源泉は、1999 年、スタンフォード大学のクランボルツ (Krumboltz) 博士がカウンセリング学会で発表した論文である。

この“計画された偶然性”は、“Positive Thinking”やクーパーライダー (Cooperrider) 教授が提唱した“AI (Appreciative Inquiry) 理論”での勇気や希望の心に通じる。

これらの詳細と活用は多岐歴大なので別途の機会に譲るとして、ここでは、

○ 振り返れば、偶然の出来事や人との出会いが自分のキャリアや人生に大きな影響を及ぼしてきた。しかし、起きたことを最大限に活用できなかった…。

○ ならば、将来のキャリアと人生を思い描く時、この“偶然”について、計画性を考慮してみたら…。好奇心旺盛→機会捕捉→行動障害克服→偶発性普遍化は、PDCA の改善発展サイクルと同じ概念で受容しやすい。

という体験認識に止めて話しを進めたい。



エレクトロニクス実装技術・NPO 法人サーキットネットワーク

国大化学会の大先輩 2 氏がこの NPO 法人の設立発起人で、75 歳を過ぎた現在も活動の主体である。声をかけていただき、私も約 6 年前から参加している。一期一会を超える今まで五会を思い出す有難いご縁である。“後生畏る可し”と“ご恩返し連鎖を起す”という私の熟年人生テーマにも繋がるので、昨年度から理事としての活動も押し載っている。会員約 100 氏の体験・知識・人脈は広範深化し、予期せぬ偶然を必然のように手繰り寄せる出来事があり、“人間一生勉強”の感を抱くことが多い。

活動のひとつとして、毎月 1 回、当 NPO 内外から講師を招き、研究会・技術交流会を開催している。実装技術の総説や事業展開の他、時折、業際や異分野の話題も勉強できる。

昨年 9 月、動物行動学者の日高敏隆先生を招聘できた。会員 K 氏の親戚ご縁による。

演題は『人間と動物の相互関係』で、今、当日の話題、そして座右の著書数冊から納得できた先生の研究成果や社会啓蒙の道程を思い起こしている。

昆虫学、動物学、動物行動学

日高先生の原点は昆虫少年。1930 年生まれの先生は、小学校時代から昆虫学者を志した。一所懸命に歩く芋虫を眺めて、“どこに行くつもり”、“何を探しているの”と問いかけ、葉っぱに到り食べ始める姿を見て、“そんなことを考えていたの”と回想しておられる。

昆虫採集を超える関心を抱き、幼少時すでに動物行動学の研究端緒におられた、ことを示唆している。

しかし、戦前という時代環境がこれを許し難く、身の置き所に煩悶されたが、担任教師の理解と尽力で道が開けた。野口英世博士の少年時代を彷彿とさせる出会いである。

解剖と手術で苦しんだが、蚕を使った昆虫ホルモンの研究で学位を得た。

当時の動物学は、例えばある生物が“ものを見ることが出来るのは?”の仕組みを研究する科学であり、日高少年が芋虫に抱いた上記のような思いとは違っていた。

その後、ローレンツのエソロジー / Ethology (動物行動学) を知り、1963年、著書『ソロモンの指環』を訳して出版された。日本でも動物行動学の草創期に当たり、東京農工大学や京都大学の教授として研究業績を積み、1982年に創設された日本動物行動学会の初代会長に就任された。

「動物行動学」とは、さまざまな動物たちのさまざまな行動を、その仕組み・機能・発達・進化という面から研究する生物学の一分野らしい。

動物は目線の先に何をとらえているのか？ 先生は、慈愛の気持で動物と対話されている。この地球、国・民族・宗教を問わず、“衆生を慈念すること尚赤子の如し”の祈りがある。“個性と文化に優劣無し”とおっしゃる。このような日常意識が人間同士の関係も穏やかにする。日本各地には動物と一緒に醸し出す心温まる昔話が多かった。

モンシロチョウとアゲハチョウ (ナミアゲハ)

同じ蝶でも生きるうえでのロジックがまるで違う、観察・実験、模索の繰り返しでわかってきた、とおっしゃる。オスがメスを見つける方法では、前者が視覚、後者が嗅覚により認知する。サナギの保護色については、前者が色と明るさ、後者が匂い等により足場の環境に摺り合わせる。

これ以上の展開は、著書、例えば『人間はどこまで動物か』をご参照下さい。

さらに、モンシロチョウとナミアゲハでは1年の設計を異にする、とおっしゃる。

前者は、早春から晩秋まで我々の周りを舞い続け、温暖な年や土地では春早くから秋遅くまで飛び回る。後者は、春の飛び始めも秋の飛び終わりの時期も決まっており、多少の寒暖にも左右されない。前者は気温に依存し、休眠サナギで越冬するか、あるいはすぐチョウになれる非休眠サナギになるか、を決めているのでばらつきがある。後者は昼間の長さに依存し、12時間45分より短くなると休眠サナギになるのでばらつきが無い。

同じ蝶でもかくも異なる。食する植物の存在時季とも密接な関係にあるようだ。

これ以上の展開は、著書、例えば『春の数えかた』をご参照下さい。

人間は思い込みや錯覚で総括や解説し、多種多様を何かで括りたがるが、自然界の現象や営みは複雑多岐、短絡や一筋縄では解明し難いことが多い。これは、研究者のみならず人生全般でも疑問・仮説・実験・検証の段階を確実に繰り返し踏み固めること、“これでわかった！”を言わせない飽くなき探究心を迫っている。

生得と学習、遺伝と環境

古来からの格言として、“梅檀は双葉より芳し”や“三つ子の魂百まで”は、“氏より育ち”や“環境は人心を移す”の対極と考えられるが、人間を含む動物全般にとって先天と後天は成長に必要な両輪であろうか？

「遺伝子」は、「生得」という個性・特質・習性と「生得的発現機構」という誘発システムを内蔵しているらしい。約束された環境や条件に遭遇して始めて、個体の遺伝的プログラムが起動し、具体的な現象や行動が発現される。雷管・火薬・花火の流れなのだろうか？

高分子化学を引き合いに出すと、温度圧力時間・モノマー（あるいはオリゴマー）とイニシエーター（あるいは触媒・硬化剤）の系・ポリマー（樹脂硬化物）の繋がりなのだろうか？

動物は、成長と共に生き抜くための知恵を発揮する。我が家の豆柴犬・大福君の成長過程を観察するに、生後2カ月で親元を離れた彼は、見よう見まねの対象が無い中で、食への欲求、住での流儀や作法、多少の芸には生き抜く“なるほど”の連続があった。

訓練・調教は、動物の生得を引出し、探索・盲導の役割や見応えのある芸を提供する。

この時、動物を“その気にさせる”環境整備や条件提示が必要になる。

人間世界でも“動機付け”や“モチベーション”が日常会話で多用される。

遺伝か？環境か？ 現存するすべての生物はどちらにも支配されてきたが、環境の選択や摺り合わせを意識？無意識？にできる生得があり、生き残ったのであろう。

マズローの欲求五段階説を考えると、動物は生理・安全・帰属への欲求の他、さらに人間の接し方次第では、承認・自尊の欲求も発現してくる。無論、自己実現への欲求を意識できるのは、人間という動物の大きな長であり、遺伝と環境を能動的に活用してきた。

一方では、生得の宝を生涯温存してきた、それに気付かなかった自分がいたのかもしれない、人間はあらゆる可能性を秘めた動物と言われる。歴史上でも熟年から一念発起し大業を成し遂げた人たちがいる。育ててもらった山河や地域にご恩返しを実践する NPO 活動を聞いたことがある。生得の引き出しは、独歩深耕と連繫拡幅の両立だと思っている。

利己的な遺伝子、動物達のファッション

動物行動学での適応度とは、自分の遺伝子をもった子孫をどれだけたくさん後代に残せるかにかかっている、とおっしゃる。人間以外の動物に適用できる話しと思いたい。

生物学者・動物行動学者のドーキンス博士が、1976年、『The Selfish Gene』を出版し、『利己的な遺伝子』という概念を世に問うた。

1991年、日高先生が『利己的な遺伝子』として共訳・出版された。“個体は遺伝子の Vehicle(運び手)”と解説され、個体は遺伝子のために遺伝子に操られて行動する、と紹介される。動物たちの行動すべてを懸命なる生き残りとして捉え、人間の言動も例外とは言えず、“起源は遺伝子”と納得してしまうと、その不可解さは、雲散霧消してしまう不思議な気分を抱かせる。

“生物の個体の行動は遺伝子の自己戦略に基づいている”、“遺伝子は利己的で自分の延命のためどんなことでもする”、“進化で重要なのは種族ではなく個体の利益”というようなメッセージが発せられている。さらに、個体のいかなる犠牲的・利他的行動も、遺伝子の利己的・合理的な振る舞いの結果にすぎない、と言うのだ。

“個体の適応度を増大させた結果、その動物は種族として生き残った”は、受容できる概念である。ダーウィンは、進化論で、生存競争に有利に働く個体の変異を適応度の増大として重視した。『利己的な遺伝子』論は、進化論ともうまく整合している。

さて、自然界の動物の愛は遺伝子が支配している？ メスには、生涯で産むことができる子供の数に制限がある。メスは、オスの求愛ダンスや求愛ファッション、メスを巡るオス同士のバトルをよく観察し、きれいで強そうなオスを愛のパートナーとして選んでいる。きれいで強そうなオスを個体として選ぶことにより、メスは自分の遺伝子の生き残りをより高めることができる。オスも自分の遺伝子を残すため、必死になってメスにアプローチする。その結果、オスはメスより大きく見てくれも良くなる。そして、孔雀のオスはどんどん見てくれが良くなり、人間をも楽しませる。同例は枚挙に遑が無い、大納得だ！

人間社会では、女性は見ただけでは男性を選ばないし、男性にも女性を選ぶ余地はある。女性はたくましい男性より、家庭第一の誠実な男性を選ぶ傾向が強いらしい。

“破滅的な人生に憧れる”というのは、まだ若気の至りなのだろう。

人間も先天では利己的な遺伝子に支配されるが、後天ではそれを制御し得る知恵や良識を脳細胞に蓄積できる動物だからである。これは中庸無難で、落ち着ける話しである。

18歳の諸君と昔の自分

日高先生の回想がある。1998年春4月、先生68歳、滋賀県立大学学長として入学式の訓示をされた。多少のばらつきはあるが、眼前の男女学生の大半は18歳、この3月までは高校生だから若い。見渡している68歳の先生は、思わず“ああ50年、半世紀違うんだ！”と、驚きというより恐怖にも似た感慨を覚えた、とおっしゃる。

1959年、29歳で東京農工大学の講師になられた。それ以来毎年、18歳の新入生と出会ってきた。1年経つと先生は1歳づつ年をとるが、入ってくるのはいつも18歳。新入生との年齢差は着実に増えて、ある時あたりから新入生の父親が先生より若くなった…。

先生が感じた恐怖は、わかりあえない新人類だからではなく、年齢差そのものとそれを飛び越える人間という動物の発達過程での不変の18歳、将来に対する憧れ・願望と困惑・不安の交錯にあり、わかりあえる18歳の心情にあった。

東大理学部動物学科に入学した18歳の先生、この時抱いた同様の心情は、時空を越え情報取り放題の新人類にも共通に存在していたのだ、とおっしゃる。

“それでも何かをしなければならぬ”18歳、先生は動物行動学からさらに言及され、太古からの営みとして教示される。

大福君の動物行動学的な成長過程 (2009年8月12日)



先生のお話しは、手放して同感できることが多い。私の会社人間時代、新入社員や中堅社員諸氏を前にキャリアの意識や獲得をカウンセリングしていた時期、“社会人として様になって欲しい”と心底そう思っていた。人生の節目で逡巡したり迷走する後輩たち、その姿に??年前の自分そのものを見て、老婆心ながら何か声をかけたくることが多い。

おわりに

ドーキンス博士によれば、人間は、生物進化の流れのままに自分の遺伝子を残すだけでは満足せず、自分のミーム (Meme/模倣子) も残したい、と願っている。ミームとは、自分の作品・仕事・自分の名声、つまり、自分が存在したことの証である。よく分かる、解る！

“これで良いのか？もっと意味のあることを！人間らしく生きたい！”では、これらの欲求はどこからくるのか？さまざまなイリュージョン（幻想）との出会いや葛藤が人間の生きる喜びや苦しみになっている、という認識がある。死の概念や多くの悲哀・不安からの逃避として、新生や神仏というイリュージョン（幻影）にすがっている現実もある。

人間は何を求めて生きているのか？動物とはあきらかに違う。喜怒哀楽の忙中であっても、ささやかなる生きる喜びを見つけ、それらを積み重ねることなのだろうか？

知るは喜び、生き甲斐のひとつなり。サーキットネットワーク、K氏、日高先生との“Planned Happenstance”に感謝しています。

参照図書

- ①日高敏隆著『春の数えかた』新潮社（2001年）
- ②日高敏隆著『人間はどこまで動物か』新潮社（2004年）
- ③日高敏隆著『チョウはなぜ飛ぶか』岩波書店（1975年）
- ④ローレンツ著・日高敏隆共訳『ソロモンの指環』早川書房（1963年）
- ⑤日高敏隆著『動物たちの戦略』読売新聞社（1992年）
- ⑥日高敏隆著『動物という文化』埼玉福祉会（1996年）
- ⑦日高敏隆著『生きものの流儀』岩波書店（2007年）
- ⑧日高敏隆著『人間は遺伝か環境か？遺伝的プログラム論』文藝春秋（2006年）
- ⑨日高敏隆著『犬のことば』青土社（1986年、増補版1999年）
- ⑩日高敏隆共著『人間について』産経新聞（2006年）
- ⑪日高敏隆著『動物と人間の世界認識』筑摩書房（2007年）

（平成21年8月9日 記）

5年の韓国生活を振り返り

佐藤 登（昭和51年電化卒・昭和53年修士修了）

ホンダとサムスン

2004年9月から韓国で仕事と生活を始めたので丁度5年が経過した。韓国文化や慣習にもずいぶん慣れ親しんできた。振り返れば社会人のスタートを切ったホンダに入社してから32年になる。そこから現在に至るまで、喜びと悩み、満足と不満、自信と葛藤など数多くの実体験を踏んできた。

いずれの場面でも考え通してきた事は、それぞれの状況下に置かれた時々の最大限の努力と実行、そしてその先にある自己実現である。その姿勢は今後も変わることはないが、時に、その行く手を阻む障害が生じることも少なからずある。

ホンダに入社した1978年には研究職を希望していたが、実際の配属では生産技術分野であって相当気持ちが落ち込んだものである。しかしそこで考えたものは、「この分野でも研究以上の研究もできないことではないから、研究所以上に良い研究成果を出して製品に反映し会社への貢献を果たそう」という気持ちの切り替えであった。

しかしそこに立ち上がった大きな壁が先輩諸氏のKKD、すなわち勘(K)と経験(K)と度胸(D)だったので驚いた。論理よりKKDが重要と言われ愕然としたが、それでもこのKKDを超える論理を打ち立てようと奮闘した。果たして、唱えて実証した自説も社内や業界に浸透し、結局は製品に反映される技術となって実現を果たすことができた。その社内の研究成果によって工学博士の学位を取得したが、信念をもって向かうことの意義を確認できた出来事であった。ここで培われた自説は学会や業界で今も活用されている。

その後、1990年に研究所に異動してからは、米国カリフォルニア州から発令されたZEV (Zero Emission Vehicle) 規制に適合させるために電気自動車とその電池開発に着手し、自動車の新エネルギーである電池技術の責任者を任された。次のハイブリッド自動車においては、自らが唱えたりチウムイオン電池の可能性を示唆し、1998年にプロジェクトを発足させ開発に勤しんだが、その後に会社方針が電池よりもキャパシタと言われる物理電池に大きくシフトした。その結果、リチウムイオン電池研究開発者は責任者である私と部下のふたりまで減り、大勢がキャパシタ開発と事業化へ携わった。

このような背景で、考え方の違いによりホンダから大学教授の道を探しつつ悶々としていたところ、サムスンから移籍の話を受け3カ月ほど考えた末に決断したのが5年前だった。

時が過ぎ、ホンダではリチウムイオン電池とキャパシタのエネルギー論争にも終止符が打たれたのは2006年ころであった。結局、ホンダのキャパシタ事業は原理的な限界から開発中止に追い込まれ、現在は電池一色に染まると共に、リチウムイオン電池への期待からGSユアサとの合弁会社を形成するに至った。当時の電池の正当性が立証されるに至ったことになる。

すなわち自分自身が唱えてきた説と洞察の方向へ物事が進んだことは、その前の自動車車体材料でのKKDの論争と類似した部分が多分にあったが、ここで得た自信は自らの洞察が正しかったという事実への帰趨そのものである。

かような経験、すなわちホンダでの自説を唱えることによる葛藤、しかしそれは正当性を立証したのだが、信念とはこのように時として論争を招き、そして孤立無援の境地に陥ることもあること、しかし信念に基いた行動をとることで、それは他人との違いを創り上げるものであること、技術は正しい方向にしか結果的には道が開けないこと、あるいは進んで行った道が結果的に正しい方向であったことを自ら経験したことになる。

ホンダの創業者である本田宗一郎は生前の書籍で多くの名言を残した。「能ある鷹は爪を出せ」「会社のために働くな、自分のために働け」「考えて貰えば、たとえホンダでうまくいなくても外から声がかかる」。この名言の意味を正に体得し貫いてきた実感がある。

サムスンに移籍してもこれまでの考えに大きな差異はない。研究開発戦略の立場からは事業性の可能性有無



に関して原理的、論理的、客観的な見方をしてきた。中には研究テーマの中止の提案、逆に将来、事業性の意味と可能性の大きいテーマに着手する方向性の示唆と実行を手がけてきた。これも数年後には判断の妥当性が証明されるだろうが、興味深いところである。

サムスンで6年目を迎えた現在、これまでの韓国での拠点を東京に移し活動することになった。六本木にある日本サムスンに逆駐在の形で席を構えたが、日本との連携や戦略立案に従事する。

グローバル企業であるホンダとサムスンを経験していることで視界が広がっていることを実感しつつ、今後のグローバル企業の責任と発展の行く末を描くシナリオ創りは大きな意味があるものと感じている。

在日韓国人との交流

2009年7月上旬、大阪において韓国にルーツを有する方々を対象にした「第4回世界海外韓人貿易協会次世代貿易スクール」に講師として招かれ講演した。OKTAと称する本組織は、韓国本国以外に在住する海外韓国人を対象とした社団法人で、本国と海外各国の貿易促進などを通じて世界的なビジネスネットワークの構築を目指している経済団体である。ソウルに国際事務局の本部があり、KOTRA（大韓貿易投資振興公社）の傘下団体として韓国政府の知識経済部の支援で運営されていることを今回のイベントを通じて知った。

現在、世界100箇所を越える都市に支会があり、支会ごとに会員がボランティアで運営しているとのことである。その活動の中の重要な事業のひとつとして「次世代貿易スクール」と言うセミナーを実施しており、今回のスクールセミナーでは私自身の経験談や次世代を担う青年に対するメッセージという観点で招聘された。

参加者の大半は日本で少なからず苦勞をされているだろうが、その分、ハングリー精神、挫けずめげずの努力と挑戦のエネルギーは日本人として見習うべきところが多い。

この講演を通じて、私自身も多様な韓国文化や歴史に触れることができ有意義であったこと、そして韓国と日本を結ぶビジネスモデルはまだ発掘代がたくさんあるとも感じた。このような研修の場を通じて、お互いが相互に刺激し合いヒントを得ながら新しいアイデアが生まれてくるものと考えている。

著者略歴 1976年学部卒、78年修士課程修了後、本田技研工業(株)入社。社内研究成果により88年東京大学工学博士。97年度名古屋大学非常勤講師兼任。99年から4年連続「世界人名事典」に掲載。(株)本田技術研究所チーフエンジニアを経て、04年9月からサムスンSDI(株)へ常務取締役として移籍。エネルギー研究開発部門統括。05年度東京農工大学客員教授兼任。2008-2010年秋田県学術顧問。2009年9月からは日本へ帰国し、東京の日本サムスンに席を構え活動中。HP: <http://members.jcom.home.ne.jp/drsato/> 日韓比較文化新聞連載記事全文掲載中。